様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７０６

研究課題名（和文）日本語を母語とする成人英語学習者の主語習得における「捉え方」意識高揚と頻度の効果

研究課題名（英文）The effects of construal awareness and frequency on the learning of the English subject by adults with first language Japanese

研究代表者
戸出　朋子（TODE, TOMOKO）

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：００４１０２５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：日本語を母語とする英語学習者の主語・述語構造の学習困難性は，日英語の事態認知の相違の反映であると応用認知言語学の先行研究では言われている。本研究は，英語的な事態の捉え方を学習者に意識させる指導が，英語主語・述語構造の出現の向上にどのような効果があるかを，日本の大学生を対象に検証した。その結果，筆記産出，口頭産出両方において，英語的な事態の捉え方を意識させる指導は，指導直後に効果が表れ，その効果は一足飛びに抽象的な主語・述語構造の習得につながるのではなく，具体的な使用場面で出会う具体的な表現を基盤に少しずつ修正を加えることによって主語・述語構造が出現するということが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Previous studies of applied cognitive linguistics have shown that Japanese students' difficulties in learning the English subject-predicate construction reflect a construal difference between English and Japanese. This study examined the effect of raising awareness of prototypical construal of English on the learning of the English subject-predicate construction. The participants were Japanese undergraduates studying English as a foreign language. The results revealed that the construal awareness was effective in both written and oral production immediately after the instruction. The study also found that its effect did not lead to a sudden abstraction but that the construction was learned on the basis of concrete expressions in meaningful language use in an item-based manner.

研究分野：第2言語習得

キーワード：英語主語述語構造　日本語主題解説型構造　事態の捉え方　事例体験　捉え方明示指導　用法基盤言語習得

１．研究開始当初の背景

(1)日本の多くの英語学習者の主語・述語構造の習得が満足な状態ではないということが，かなりの研究で指摘されている（例，Shibata，2006；梅原・冨永，2014)。学習者の多くが名詞句・動詞句という語順を主語・述語としてではなく主題・解説型構造と捉えていることによる主題・解説型誤文（例，*School uniforms don’t need to wear every morning.）を受け入れたり産出したりするものである。これは，日本語の主題・解説構造が，転移したものと考えられる。この現象は，主題卓越型の言語と主語卓越型の言語の間に起こる影響として第２言語習得研究で研究されてきた(例，Han，2000；Jung，2004)。

(2)認知言語学を紐解くと，このような日本語の主題・解説型構造の負の転移は，日英語の事態認知の相違の反映と説明できる。川瀬（2015，8 月）によると，英語はモノである参与者に注目する事態認知を典型とする言語であるのに対し，日本語はコトである出来事がおこる場に第１の注目を置く言語である。言い換えると，主語卓越型である英語は主客を区別し＜動作主志向的＞に事態を捉える「する言語」で第１の注目が個体（主語）に置かれるのに対し，主題卓越型の濃い日本語は＜出来事全体把握志向的＞な「なる言語」で，「ある場においてこうである」と「概念の場としての主題」に第１の注目が向けられる。日本語話者にとって，英語の参与者に第１の注目を置く事態認知は不慣れなものであり，学習者が第１に直面する課題は，この捉え方の再構築であると言うことができる。

(3) では,どのように教室で捉え方再構築を促していけばいいのか。事態の捉え方は元来言語使用の中で具体事例を基盤に徐々に形成される(Slobin，1996)ので，意味ある文脈での言語使用が捉え方再構築の必要条件である(Achard，2008)。しかし第２言語習得の場合，それだけに任せて一般化を促す意図的な試みがなされない場合，学習者は体験した事例をあたかも定型表現のように扱い抽象化が進まない可能性がある(Holme，2010)。認知文法（Langacker，2008）の道具立てであるイメージスキーマを用いて，英語の典型的な捉え方への意識を促すことが一助になると思われる。

２．研究の目的

本研究では，言語使用の中で，具体事例を経験させつつ英語的な事態の捉え方を学習者に意識させる指導が効果的だと仮定し，日本の大学で英語を学ぶ日本語母語話者を対象に実験する。設定した研究課題は，英語的事態の捉え方をイメージ化した図を補助に具体事例の経験をすることは，

(1)談話レベルの筆記産出において，主語・述語構造の出現の向上に効果があるだろうか，

(2)談話レベルの口頭産出において，主語・述語構造の出現の向上に効果があるだろうか，

である。

３．研究の方法

日本の大学で英語を外国語として履修する初級レベルの学生を対象に実験を行った。上記の課題（１）を研究するための実験は，下の（１），課題（２）を研究するための実験は，下の（２）に該当する。

（１）医療福祉系の大学の教養英語のクラス３クラスで事前・直後・遅延テストからなる指導実験を行った。クラス A を「捉え方の明示＋産出練習群(Construal Awareness + Practice 群，以下 CA 群)，クラス B を「従来型文法指導＋産出練習群（Traditional Practice 群，以下 TP 群)，クラス C を統制群とした。CA 群は 18 名，TP 群は 22 名，統制群は 25 名の計 65 名であった。指導に充てた時間は，どの群も，4 単位時間（1 単位 90 分）であった。CA 群には，英語の典型的な事態把握であるモノに注目するスル型把握を表す図を示し，その図に語句を当てはめさせて，食生活と健康について述べた日本語の文章を英作文させた。そしてそれを口頭産出練習させた。TP 群には，CA 群に与えたのと同じ食生活と健康について述べた日本語の文章を英作文させて答え合わせをし，主語と述語動詞を同定させ，口頭産出練習をさせた。統制群には，CA 群や TP 群に与えた食生活と健康について述べた例文は与えず，また，主語・述語構造に関する意識付けも行わず，その代りに，教科書を使った通常授業を行った。指導前に事前テスト，指導直後に直後テスト，2 週間後に遅延テストを行った。テストの内容は，エッセイテストとし，どのテストも Recent Dietary Habits of Japanese People という題で，辞書などを何も参照せずに独力で英語で文章を書かせた。テストの採点は，節を分析単位とし，全節数に対する正しい語順の主語・述語構造の割合を産出した。そして，各テストごとに各群の平均値を算出し，3 群の平均値の変化を 3×3 反復測定分散分析にかけた。

（2）大学の教養英語で外国語として英語を学ぶ大学生から募集し，自由意思により 56 名に実験の参加者になってもらった。そしてその参加者を，コミュニカティブ捉え方意識高揚群（コミュニカティブ CA 群，19 名)，コミュニカティブ暗示的指導群（19 名)，非コミュニカティブ捉え方指導群（非コミュニカティブ CA 群，18 名）にランダムに割り当てた。データ収集は個別に行い，事前テストと

事後テストからなる指導実験を行った。事前テストと事後テストはどちらも口頭で行われた。テーマが与えられ（例，成功に重要なのは努力・やる気か，それとも才能か），それに対する自分の意見を，単語リストを参照しながら英語で述べるというテストだった。コミュニカティブ CA 群とコミュニカティブ暗示的指導群には個別教材を用いた指導が行われた。個別教材には，その参加者が事前テストで意図していたことが日本語で書かれていた。この個別教材を用いて，参加者は事前テストで述べたかったことを再度英語で述べた。その際，コミュニカティブ CA 群にはイメージ図を用いて英語の捉え方への意識が高まるような訂正的フィードバックを与え，コミュニカティブ暗示的指導群には，リキャスト等の暗示的訂正フィードバックを行った。非コミュニカティブ CA 群には，個別教材ではなく，与えたテーマとは関係のない例文を用いて産出練習をさせた。その際，捉え方への意識高揚をコミュニカティブ CA 群に与えたのと同様の方法で行った。テストの採点は，全体の節数に対する正しい語順の節の割合という観点で行われた。そして，3 群の平均値の変化を 3×2 反復測定分散分析で分析した。

４．研究成果

上の研究方法で述べた(1)，(2)のそれぞれの実験の結果を次に述べる。

(1) 次の図 1 は，CA 群，TP 群，統制群それぞれの筆記産出における主語・述語構造の出現率の平均値の変化を表したグラフである。

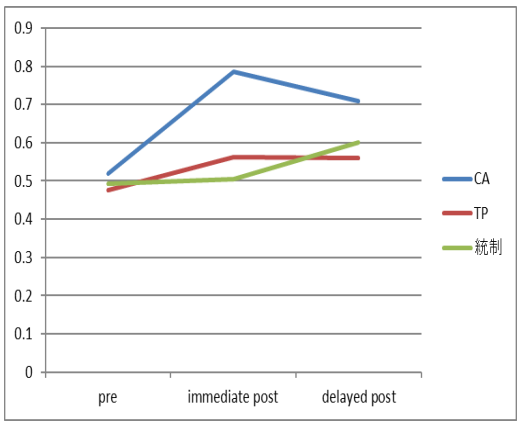

図１主語・述語構造出現率の変化(筆記)

指導直後では，CA 群の有意な効果が認められたが，2 週間後に行った遅延テストでは，三群の間に有意な差は見られなくなっていた。

(2) 次の図 2 は，コミュニカティブ CA 群，コミュニカティブ暗示的指導群，非コミュニカティブ CA 群それぞれの口頭産出における主語・述語出現率の事前産出から事後産出への平均値の変化を表したものである。

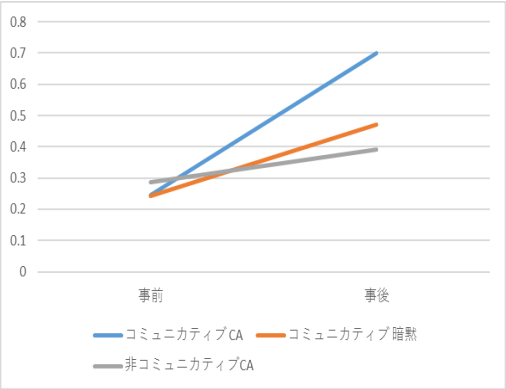

図２主語・述語出現率の変化(口頭)

3×2 反復測定分散分析の結果，事前産出から事後産出にかけて，コミュニカティブ CA 群とコミュニカティブ暗示的指導群には有意な伸びが見られたが，非コミュニカティブ CA 群では有意な伸びが確認されなかった。また，事後産出では，コミュニカティブ CA 群が他の２群に比べて有意にまさっていた。コミュニカティブ暗示的指導群と非コミュニカティブ CA 群の間には，有意差は認められなかった。この分析に加えて，コミュニカティブ CA 群とコミュニカティブ暗示的指導群の事後産出が，どの程度，指導の際に与えた事例(例文)の記憶に依存しているかを調べた。両群の事後テストにおける産出のうち主語・述語になっているものを，まる覚え（3 点）から創造（0 点）までの連続体として数値化し，両群の平均値（コミュニカティブ CA 群，1.7 点；コミュニカティブ暗示的指導群 1.9 点）を対応のない t 検定で比較した。結果は，有意差が確認されず，どちらの群も，指導された事例を基に，語を一部入れ替えて自分の意図を伝えようとしていることが明らかになった。

以上の結果から言えることは，言語使用の中で，具体事例を経験させつつ英語的な事態の捉え方を学習者に意識させる指導は，少なくとも指導直後に効果が表れるということである。そして，それは一足飛びに，抽象的な主語・述語構造の習得につながるのではなく，具体的な使用場面で出会う具体的な言語表現を基盤に少しずつ修正を加えることにより主語・述語構造が出現するということが示された。これは，言語習得は基本的には用法基盤で，数多くの言語事例に触れることが必須であるということを示唆している。また，自分の表現したい意味とは関連のない例文で事態の捉え方を意識させても効果がないことも明らかになった。このことから，英語の主語・述語構造の発達に何より重要なことは，生徒が興味を持てる教材で豊富な具体事例に触れさせ，その中で，英語的な事態の捉え方への意識高揚を根気強く行っていくこ

とであると結論付けることができる。本研究は，一見容易に思える主語・述語構造が日本語を母語とする英語学習者にとっては習得が一筋縄でいかないこと，そしてその克服のためには目に見えない認知の問題に教師が意識を向け根気強く指導を行っていくことの重要性を示唆している点で，日本の英語教育への意義が認められる。さらに，国際的にみると，北米やヨーロッパでの第２言語習得研究・英語教育学が主流である中で，言語的に離れているとされる日本語を母語とする英語学習者の母語の影響とそれを克服するための指導を，応用認知言語学の視点から研究したという点でも先端をいくものである。本研究は，実際の教室での授業ではなく，個別に行った実験研究だった。今後，実際の教室の中で，生徒が興味を持てる教材で豊富な具体事例に触れさせ，その中で，英語的な事態の捉え方への意識高揚を根気強く行っていくことを行い，縦断的にデータをとって検証していくことが課題である。

＜引用文献＞

①Archard, M. (2008). Teaching construal: Cognitive pedagogical grammar. In P. Robinson, & N. C. Ellis (Eds.), *Handbook of cognitive linguistics and second language acquisition* (pp.432-455). New York, NY: Routledge.

② Han, Z. (2000). Persistence of the implicit influence of NL: The case of the pseudo-passive. *Applied Linguistics, 21*, 78-105.

③ Holme, R. (2010). Construction grammars: Towards a pedagogical model. *AILA Review, 23,* 115-133.

④Jung, E. H. (2004). Topic and subject prominence in interlanguage development. *Language Learning, 54*, 713-738.

⑤川瀬義清（2015, 8 月）『日英事態把握の違い』The JACET 54th International Convention 口頭発表，鹿児島市

⑥ Langacker, R. W. (2008). *Cognitive grammar: A basic introduction.* Oxford: Oxford University Press.

⑦Shibata, M. (2006). Topic marking in English composition by Japanese EFL learners. *Scripsimus* (琉球大学言語文化研究紀要). 15, 1-26.

⑧Slobin, D. I. (1996). From “thought and language” to “thinking for speaking.” In J. Gumperz, & S. Levinson (Eds.), *Rethinking linguistic relativity* (pp.70-96). Cambridge: Cambridge University Press.

⑨梅原大輔・冨永英夫(2014)「日本人英語学習者は主語をどうとらえているか－量的・質的研究」*JACET Kansai Journal, 16,* 103-122.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 戸出朋子,「多読に媒介される用法基盤第 2 言語発達の可能性－英語 SVO 文型に焦点を当てたテクスト分析－」，広島修大論集，査読なし，第 56 巻第 2 号，2016，pp.1-16. https://shudo-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2365&item_no=1&page_id=13&block_id=28

② 戸出朋子,「日本人英語学習者の主語・述語構造の微視発生－学習者・教師間の対話の分析から」，広島修大論集，査読なし，第 55 巻第 2 号，2015，pp.73-90. https://shudo-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2260&item_no=1&page_id=13&block_id=28

〔学会発表〕（計　11　件）

① Tomoko Tode, Effects of construal awareness on the Learning of typologically different second language grammar, American Association for Applied Linguistics, 2016 年 4 月 12 日, Orlando（アメリカ合衆国）

② Tomoko Tode, Adaptive imitations in task experience and developmental trajectories: A multiple-case study, The Sixth International Conference on Task-Based Language Teaching, 2015 年 9 月 16 日, Leuven(ベルギー)

③ 戸出朋子,「捉え方」意識高揚の役割－主語・述語構造に焦点を当てて，The JACET 54th (2015) International Convention, 2015 年 8 月 30 日, 鹿児島大学（鹿児島県・鹿児島市）

④ Tomoko Tode, Usage-based effects of construal awareness on the learning of typologically different L2 grammar, 24th Annual Conference of the European Second Language Association, 2014 年 9 月 3 日, York（英国）

⑤ 戸出朋子,「捉え方」指導における英語主語概念形成のダイナミズム－日本語を母語とする成人英語学習者のケース・スタディ－，第 40 回全国英語教育学会徳島研究大会, 2014 年 8 月 9 日, 徳島大学(徳島県・徳島市)

⑥ Tomoko Tode, Usage-based learning in scaffolded production: A case of a

task-based EFL learner, International Conference on Task-Based Language Teaching 2013, 2013年10月4日, Banff(カナダ)

⑦ 戸出朋子, 認知文法を応用した「捉え方」練習の効果－日本語母語話者の英語主語習得, 第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会, 2013年8月11日, 北星学園大学(北海道・札幌市)

６．研究組織

(1)研究代表者

戸出　朋子　（TODE, Tomoko）
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：00410259